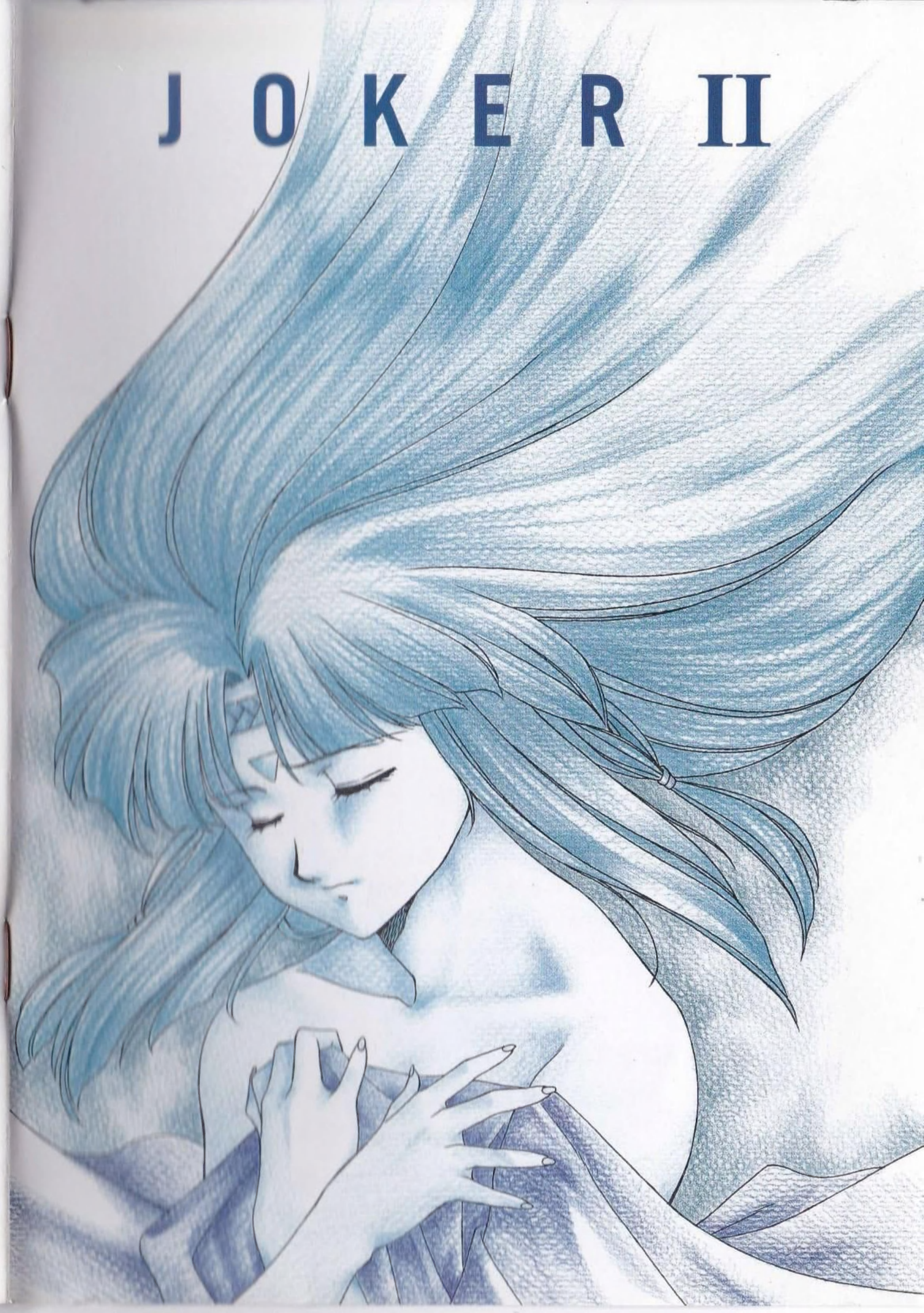

JOKER II

《JOKER 2 マニュアル　目次》

はじめに……………………………………………………………………………………[1]
対応機種と動作環境…………………………………………………………………………[3]
ゲームの起動方法……………………………………………………………………………[4]
ゲームの操作方法……………………………………………………………………………[5]
物語……………………………………………………………………………………………[6]
登場人物紹介…………………………………………………………………………………[8]
ヒルデガード物語……………………………………………………………………………[15]
バーディーソフト・ファンクラブのお知らせ………………………………………………[26]
終わりに・ユーザーサポート…………………………………………………………………[27]
開発部二課……………………………………………………………………………………[29]

特典

この度、当バーディーソフトでは、バーディーソフトキャラクターグッズを製作、販売する事になりました。
今回のキャラクターグッズは、カレンダーと下敷きです。カレンダーは、B４二つ折りの、当然フルカラー、1992年４月から翌1993年３月まで12ヶ月分のカレンダーで、下敷きは、これも当然フルカラーのB５の大きさです。
この２つは、セットのみの限定販売で、1992年２月末まで注文を承ります。
さて、問題のお値段ですが、セットで、2,000円です。
また、当社発売のゲームソフト、[BEAST２]「バーディーワールド」を通信販売で、定価にてご注文くださった方には、サービスとして、バーディーソフト特性テレフォンカードをプレゼントいたしております。
いづれも、送料は500円かかりますので、あしからず。
ご注文は、下記住所に、現金書留か、郵便小為替でお送りください。
みなさんのご注文をお待ちしています。

《ご注文先》

〒124 東京都葛飾区堀切３－12－８

バーディーソフト
アイテムグッズ 係

《はじめに》

「JOKER2(ジョーカー2)」をお買い上げ下さいまして、誠にありがとう御座います。JOKER2は、開発部2課が制作した「JOKER」の続編である西部劇のアドベンチャーゲームです。

JOKERシリーズ開発スタッフ　開発2課一同

『林家　ぱー』

えー。

今回は真面目にひとつ。

とりあえず「JOKER」はこいつで完結です。

愛着あったからなー。終わっちゃうって淋しい。

ま、とにかくワイルド以下、林家の可愛い子供達の最後(一応ね。)の活躍をじっくりとお楽しみ下さいッ！

…原画もCGもパッケージもマニュアルも、ハナヂを吹く程がんばったんだよう…

本当だよう。うそじゃないよう。

それでは、ファンクラブ会報で、またお逢いしましょう。

ひゅーーーほっほっほ…

JOKER外伝描く！かもね。の、林家ぱー

『美龍』

美龍（メイロン）です。

えー、いよいよ「JOKER」も終局を迎え…

この作品ともこれでお別れです。

やはり、シリーズもの（たとえ2本でも）は、すべて終わると、胸に…こう…なんといいますか、くるモノがありますね。

ああ、目頭が熱くなる……

ブランカやスペードやリディアや…酋長や、神父…（お気に入り）

もう、色塗ってきれーきれーにしてあげるのも、これが最後なのかぁ……と思うと。

ああ……胸が……苦しい……。

JOKERでこうなんだから、CALシリーズでは……私、どうなってしまうんだろ……？

ね？　ぱーちゃん、あきまさき？

悲しみの美龍

『あき　まさき』

マニュアルには「ヒルデガード物語」なんてのもあります。より、JOKERの世界を深めたい人は読んでみて下さい。

「登場人物の紹介」は、かなり本編に立ち入った事まで書いてあるので、深い事まで知りたくない人は、ゲームの方を先に進めるのがいいでしょう。

では、「JOKER」の最終話です。存分にお楽しみ下さい……

ワイルドになりきって書き上げた、あきまさき

《対応機種と動作環境》

「JOKER 2」は、以下の機種に対応しています。
お買い求めいただいたゲームソフトが、ご使用の機種に対応しているか、ご確認下さい。

「PC9801Vシリーズ以降・EPSON PC286，386シリーズ」

メインメモリ640KB以上必要。
FM音源ボードを実装していない場合は、音楽をお楽しみになれません。
1Mタイプのディスクドライブを2ドライブ必要。

「X68000シリーズ」

特別な動作環境はありません。

「FM TOWNSシリーズ」

メインメモリが2M以上必要。
2ドライブモード。

上記以外の機種では、動作保証ができません。
尚、ラップトップ、ノートでの動作はいたしませんのでご了承下さい。

《ゲームの起動方法》

「PC9801Vシリーズ以降」

ドライブ1にゲームディスクA、
ドライブ2にゲームディスクBを入れて、リセットして下さい。

「X68000シリーズ」

ドライブ0にゲームディスクA、
ドライブ1にゲームディスクBを入れて、リセットして下さい。
ハードディスク内蔵の場合は、OPT 1キーを押しながら起動して下さい。

「FM—TOWNSシリーズ」

ドライブ0にゲームディスクA、
ドライブ1にゲームディスクBを入れて、リセットして下さい。

注. ゲームディスクの差し替えは、画面上の指示に従って下さい。

《ゲームの操作方法》

「キーボード使用の場合」

	決定	スペースキー
	コマンド選択	テンキー

「マウス使用の場合」

	決定	左クリック

《物語》

JOKER復活の生け贄として、ワイルドは自分の村とラウラを失ってしまった。
ラウラが行方不明になってからも、JOKERはまだ復活していない。
JOKER復活には、まだ時が満ちていないのだろうか？
おれは、村とラウラの仇であるクラウディアとヒルデガードに復讐する為に、女ガンマンのブランカと共にこの西部をさすらい歩く……
途中、クレメンタインという女ばかりのインディアン村で、女戦士シノーラ、女酋長クレメンタインの助けを得て、クラウディアとヒルデガードを見つけたおれは、JOKER復活を阻止しようとするが……

Starring, Co-Starring and The Others

《登場人物紹介》

WILD

「ワイルド　WILD＝BLEED」

インディアンと白人の混血児。ワイルドとは彼の性格から取ったインディアン同士のニックネームで、彼はいつも父の形見である２丁の拳銃を腰に吊るしている。

ラウラとは幼なじみであり、喧嘩相手でもある。

かなりの女好きだが、本当はラウラを一途に想っている。現在、他に恋人はジーン、シェリーがいる。ブランカはどうやら当人同士もよくわからない関係らしい。ラウラ以外は全員肉体関係を持つ。一夜限りの女性も数多い。

束ねてあった後ろ髪は村が全滅した直後に自分のナイフで切り落としている。昔、ラウラに切りなさいと怒られた事を思い返しての行為かどうかはわからない。その切った髪をラウラの部屋に置いてきた事から考えると、どうもそのようであるが、ただ単にラウラが村に戻った時に自分の生死を知らせる為かも知れない。

彼はハンターの血を引いていて、戦闘系の術に長けている。銃の扱いに関しては西部一であろう。首に掛けてある装飾品はラウラの贈り物。

性格は粗野だが、いい若者である。19歳。

「ブランカ　BRANCA」

ワイルドとつるんで賞金稼ぎ（バウンティーハンター）を仕事にするが、本当の彼女の目的は妹を捜し出して『城』に連れ戻す事である。

彼女は吸血鬼にしか知られていない幻の名酒『名なし』をワイルドと共に封を切っている。これは彼女が『城』から黙って持ち出した物で、２度と手に入らない。この酒には『血よりも濃い絆の仲間』という意味がある。吸血鬼が血よりも大切にした物をこうして形にする事は珍しく、またそれ故に名前もつけられなかった。

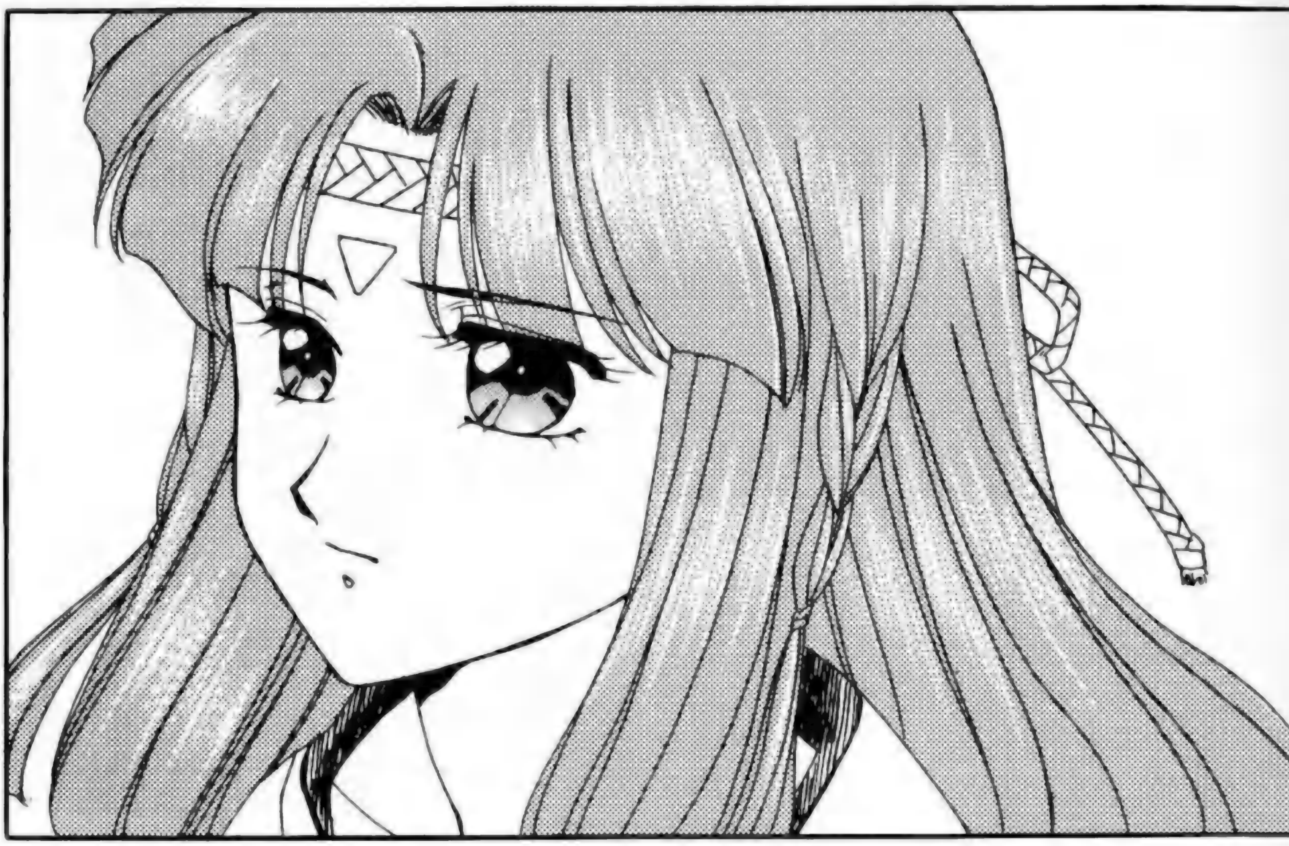
ブランカは、ワイルドに何度も体を許してはいるが、どうも両想いという訳ではないらしい。ワイルドは人間、彼女は吸血鬼である事は２人が充分にわかっている。

ブランカは吸血鬼の中でも混じり気なしの生粋な吸血鬼で、それは一族中で覇者たる資格を生まれもって持ち合わせている事を意味する。彼女の家系からして、人間と結ばれる事はまず許されない。

家族は、両親と妹のヒルデガード（ヒルダ）の４人の筈だが、吸血鬼によくみられる人間との間に戯れにつくった異母兄弟も多いようである。

BRANCA

LAURA



「ラウラ　LAURA」

ワイルドと同じインディアンの部族の娘。17歳。

白い魔術と賞される彼女の祈祷はクラウディアとは正反対の性質を持つ力で、村では巫女としての戒律の為に隔離されている。ワイルドはこの戒律を破って、ラウラの顔を見にちょくちょく忍び込む。村人もある程度はそれを黙認している。

ラウラの処女性と巫女としての力の為、格好の生け贄に選ばれてしまう。

体のマーキングはクラウディアが施した物。鳩の血で染め上げ、その上に呪文を施してある為、普通に洗い流しても消す事はできない。

額のマーキングはラウラの母親が施した物で、クラウディアとは関係がない。『神の御加護と御導きを』という意味がある。

ラウラの呪文は主に古代ラテン語にて詠唱されるが、一瞬でも速く呪文を唱える必要がある場合には、『高速言語』が使用される。

高速言語とは、1つの言葉（発音）に複数の意味の呪文を含んだ言語である。普通の人間では聞き取れないし（聞こえない訳ではない）発音できない。

「ヒルデガード　HILDEGARD」

魔性の血を従えた彼女は生粋の吸血鬼であり、その希有なまでの由緒正しい吸血の血筋は同じバンパイアの中でもその頂点に君臨できるだけの力を秘めている。彼女の物腰の大人しい風貌さゆえに、普段の姿からはその力も想像が難しい。反面、人間を愛するという感情にとまどっている。ブランカの実の妹であり、愛称はヒルダ。

HILDEGARD

CLAUDIA

「クラウディア　CLAUDIA」

どこか人外の匂いを漂わすこの美女は、やはり黒魔術的な祈祷に身を委ねていた。生け贄を捧げてまでの執拗な魔術を繰り返す彼女は不老の身となり、いつまでもその美貌のまま魔術に明け暮れている。黒い謎に包まれた彼女の目的は、ワイルドとラウラを巻き込むものだった。

「ライアー神父　LIER」

ワイルドの父親と昔知り合いだったらしいカトリックの神父。

彼は神父の割には、豪快な性格と風貌の持ち主であり、神父の服を脱がせればおよそ聖職者には見えない。ワイルドにとって、いい「おっさん」である。西部の街に来る以前に、ハンガリーのトランシルバニア地方にてヒルデガードと面識がある。

「スペードクイーン　SPADE＝QUEEN」

西部の街に古くからいる女占い師（情報屋）。

神秘な香りを漂わす彼女は西部の街に出て来たばかりのワイルドの助けになってくれる。

スペードクイーンとは彼女の呼び名であり、正式には名前という訳ではない。代々スペードクイーンと呼ばれた女性は数を知れない。彼女が何代目かは不明。

彼女はワイルドの父親の事に詳しいような口ぶりをした事がある。それは、彼女にとってワイルドの父親は肉体関係を持った唯一人の人物だからである。

彼女の武器は54種類のトランプに、54種類の呪文を刻んだ物で、手裏剣かブーメランのように操り、1度に複数の敵を倒す。尚、材質は銀かチタン合金に酷似した物と思われる。

彼女がなぜ不老不死なのかは不明であるが、助手のリディアと1度だけ手合わせをした事がある。その時も彼女は無傷であった。ブランカやヒルダのように吸血鬼という訳でもないらしい。

今現在、恋人はいない。見た目の歳は20代後半。冷静沈着で頭脳明晰の超美人。

服は紫や黒を好んで着る。下着はスリーインワンが多い。

「シェリー・フラドー　SHERRY＝JURADO」

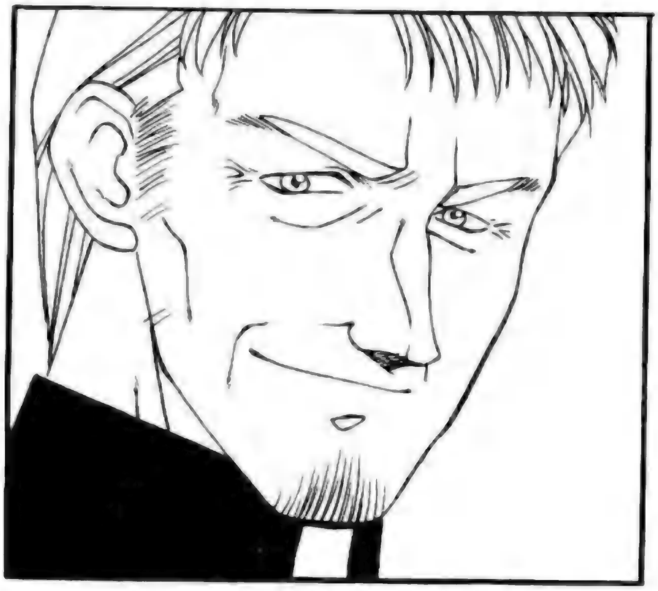
娼館フィーメルの娼婦見習い。16歳。

父親がメキシコ系の血を引く有名なフラド一家のワーウルフハンターであったが、既に現在はいない。両親を亡くしてからは、幼なじみのジーンがいる娼館フィーメルを頼り、生活の為に娼婦見習いを始めた。元お嬢様で愛情の中で育った彼女だが、今は、ジーンだけが頼りであり、また姉のような存在である。彼女が娼婦としての舞台に立ったのは一度だけで、後はワイルドが引き取った。

「ジーン・ブルーム　JEAN＝BLOOM」

娼館フィーメルの娼婦。20歳。

ブルーム家の長女として生まれるが、娼婦としての道を歩む。娼館フィーメルのいちばん人気で、彼女自身も娼婦としての自分にプライドを持っている。性格は、面倒見がよく、幼なじみのシェリーから目が離せない姐御肌的な性格である。シェリーにとっては、いいお姉さんである。仕事以外の異性関係と言えば、密かにワイルドに淡い恋心を抱いているくらいである。最近髪をのばしている。



FATHER＝LIER

SPADE＝QUEEN

SHERRY＝JURADO

JEAN＝BLOOM

ヒルデガード物語

AKI MASAKI

「やれやれ……わざわざハンガリーまで来て、雨なんかに降られちゃかなわんな……」
先程まで穏やかだった天気が、今にも崩れだしそうだった。
山道はそれ程険しくはないが、雨が降るとなれば話は違う。
神父が愚痴をこぼし、空を見上げる。
神父の姿をしてはいるが、どこか瓢々(ヒョウヒョウ)としていて、その顔は不精髭をはやし、いかつい体躯(タイク)はおよそ拳闘家か荒武者を思わせる。
「雨宿りできる場所を探さんとな……今夜は冷えそうだ」
「ああ」
神父の隣で、精悍(セイカン)な男が答えた。旅人の格好はしているが、一目で屈強な男と知れる。
少し長めにカットされたラフな蒼い髪に、同色の瞳……両方の腰には二丁の拳銃がぶらさげられている。
「まだ、着かんのかな？」
神父がごちた。
「まだだな」
男の示す方向に建物が見えた。小高い丘の上に立てられた古城である。その周りには、おおいしげった木々に囲まれている。
神父と男は、その古城に向かっていた。
「この街には、もう殆ど若い娘はいないそうだ……つまらん所だとは思わないか？」
「そうだな」
「吸血鬼もそろそろ自分達の食料がこの街では底を尽きたかな？」
今は夕暮れ時であった。陽はまだ沈んではいない。
二人が街に滞在した限りでは、殆ど若い娘を見かけなかった。
最も、吸血鬼を恐れて家から女は外に出ないのが常識になりつつあったのだが。
二人は、この街に現れる吸血鬼を退治する為に、この地に訪れていた。
「女の吸血鬼は、男の血を吸うそうだぞ？」
神父が男に歯を剥いた。
「そのようだな」
「美形が狙われやすいそうだ。わしも気をつけんとな」
神父は、胸の十字架を握り締めながら言った。
神父は笑った。男もつられて笑う。
雨は次第に激しくなってきた。
草木が雨露でしっとりと濡れ、地面を弾く雨が次第に雨音を増していった。

だんだんと雨が霧のようになって、辺りを覆い始めていた。
いよいよ雨は本格的に降りだしたらしい。

雨が簾（スダレ）のように二人の視界を奪っている。
その簾の奥で、一つの気配がわいた。
「だれだ？」
と、神父が問うた。
問うてから、気配は近づいて来る事で応えた。
雨が創り出す幻想のような霧に包まれる中、その中心が裂けるように、小さな人影が現れた。
「だれだ？」
神父は小さな人影にもう一度問うた。
ここからでは、影は人影のままであった。
人影は女の形をしていた。
今度は、すぐに応えはあった。
「ここは、我が城の領地。それを知って、足を踏み入れるか」
燦々（サンサン）と降りそそぐ雨の音を介せずに、美しい声が響いた。
その声にふさわしいかのように、霧の中から影が近づくにつれ、美しい少女が姿を現わした。
神父も男も一瞬息を引き、魅入られたかのように、全ての動きを止めていた。
美しかった。神のいたずらに造作された彫刻があるとすれば、この少女に間違いはないだろう。
碧眼の瞳は、深く蒼く、幻想さえ色あせる不思議な人形を思わせた。
長くのばした金色の髪は、腰の中ごろで切り揃えられ、少女特有の清楚さを譲(カモ)し出している。
少女の肌は、透き通るように白く、知らないものが見れば、病的な白さを連想するだろう。
その肌の色とは対象的に、しかし、これぱかりは理想的に形作られたその唇が、その幼い容貌とは裏腹に妖艶でさえあった。
唇だけが、赤く紅色（クレナイイロ）に染まっていた……。
「驚いたな。こんなに近づかれるまで気配を感じなかった」
「…………………」
頷きこそしなかったが、男も同じらしい。
吸血鬼は霧にさえも姿をかえる……そんな言葉が、男の脳裏をよぎった。
「お嬢さんが、噂の吸血鬼かな？」
神父が、右手を胸に当てて、仰々（ギョウギョウ）しく、頭を下げる。
男は、その様子を面白そうに眺めていた。
この二人を見ていると、ふざけているようにも見える。
少女は応えず、二人の目を見据えていた。
「吸血鬼は、雨の日には出ないと聞くが、お譲さんは特別のようですな？」
神父は、少女に不用意に近づきながら訪ねた。不思議な事にお互いに隔てられ

た距離は少しも縮まりはしなかった。
「この数百年、我が『城』を落とそうとする輩が、あとをたたぬ。お前たちも、その口か」
少女が初めて口にした言葉は悽愴（セイソウ）さに加え、凜（リン）とした響きを持っていた。
「参ったな。お譲さんは、この若さで年上だよ」
「そんなもんさ。おれたちも歳をとる訳だ」
「この地に赴（オモム）いた訳はやはり、私らの命を狩る為か？」
少女が静かに問うた。
「恐れながら……神が望むのです」
神父は空を仰ぎ、「アーメン」とばかりに胸に十字をきった。
「面白い男。そなた、神父か？そちらの男はハンターだな？」
「ごもっとも」
男は隠さず応えた。彼は、人間以外は何でも狩ると恐れられたハンターなのだ。
「それにしても、陽光も、雨水も苦にしないとは、お父上の血筋のせいかな？」
神父の問いに少女は応えない。
「さて、二人一緒じゃレディに失礼だな。お前……やるか？」
神父が男に問う。
「おれは、手出ししない約束だ」
「そうか？」
「そうさ」
そう言うなり、男はさっさとわきにどいてしまった。すっかり傍観(ボウカン)をきめ込むらしい。
「では、一つお相手して貰おうか？……お譲さん」
神父は拳闘の構えをとった。それは中国拳法にどこか似ていた。
「二人でかかってきてもよいのだぞ」
少女は、自信に満ちた笑顔で応えた。
「有り難いが、そのご好意には及ばんよ」
神父も、自信に満ちた笑顔で応えた。
「吸血鬼は、生き血を啜る事により、死後も肉体は朽ちる事なく存在し続けると聞く……どれ、ちょっと試してみるか？」
不意に神父が美しい女に歩み寄り、頭をぐるりと回して、首の骨を鳴らす。
こきっという小気味よい音が響いた。
「お前は、そこでみてろよ」
神父は相棒に釘をさした。

「ハッ!!」
神父は、鋭い突きを少女に浴びせた。

少女は、それを上回るスピードで、神父の拳をかわす。
神父のケリもとんだ。
これも殆ど体勢を崩さずにかわしきる。
続けて、瞬く間に幾度も突きを放つ。
常人では、とても見切る事のできぬ早さで繰り出される拳を、まるで手玉に取るかのように全て紙一重でかわしきっていた。
「ほお……」
一見、神父が一方的に攻めているように見えるが、息が荒くなっているのは、神父の方であった。
「このお譲さん……なかなかやるぞ」
いつつけられたものか、神父の頬から、一筋の血が珠となってにじみ始めた。
少女の左手の指先が変化していた。
先ほど迄は、綺麗に切り揃えられた美しい五指の爪が、三十センチばかり鋭く伸びてる。
「まじめにやれ」
男が叱咤（シッタ）した。
「お前は手を出すなよ」
神父がちらりと男の方を向くと、急速に少女との間合いを詰めた。
少女は近づくにつれ美しさが増すようであった。
少女の瞳が、かっと見開かれる。
「ハッ！」
神父は胸にかかった十字架をちぎり、拳と一緒に少女の胸に叩きつけた。
少女の胸で、十字架が灼けるように白い煙を放つ。
肉の灼けただれる嫌な匂いが、鼻孔をついた。
「く……」
少女はバランスを崩し、危うく片膝をつきそうになった。
少女の服は十字に灼けただれ、可愛らしい胸が煙を吐いている。
十字架はその少女の胸に食い込むようにして離れようとしない。
「すまんな……少しばかり辛いぞ」
少女は、胸に張り付く十字架を爪の伸びきっていない右手で剥し取ろうと握り締めた。
少女の右手から、白煙がじゅうじゅうと音をたてながらのぼっている。
「その十字架を剥すのはちょいと困難だぞ」
少女は苦痛の表情を浮かべて、神父を睨みつけた。深紅に燃えた双眸が、絶対の自信を込めて十字架を放った神父を凍てつかせた。
少女が、十字架を握り締めた途端に、突き刺すような悲鳴が辺りを轟かせた。
少女は唇を噛みきりながらも、灼け焦げた掌（テノヒラ）で十字架を剥し取ろうとする。

「まさか……!?」
少女の掌から一層の白煙がたち上がると、その右手で十字架を剝ぎ取った。
そして、あまつさえ、その十字架を電光の速さで神父に投げ返すまでやってのけたのだ。
剝ぎ取った十字架が神父の顔面に当たる寸前で、彼の手に絡み取られた十字架は、彼の掌さえも灼けただらせ、やがて、十字架の熱が神父の掌でおさまっていった。
「お前の十字架が跳ね返される所……初めて見たぞ」
男が、少しも驚いたふうもなく言った。
「………………」
神父は戦慄していた。
これほどの精神力を持った吸血鬼……やはり……
「帰ろうかな?」
ここまできてこの台詞とは、余程の豪傑か馬鹿者か。
「逃さんぞ……この傷の礼はさせて貰う」
爪の生えた左手を高らかにあげる。
少女の唇がますます血の色に染まっていた。その可愛らしい唇のわきからのぞく二本の白き輝きは牙ではなかろうか。
みるみる内に、胸の傷がふさがり始めた。
「再生……か!?」
燃え尽きた胸を覆う服こそ元に戻らぬとはいえ、完全に肌は美しく白い肌を取り戻しつつあった。
「先程の技は、もう二度ときかんぞ」
少女の言うように神父も二度と効果があるとは思わなかった。
そして、神父は自分の目を疑うかのように、目を見開いて少女を見つめた。
実際、背丈・体つきとも明らかに違っていた。
見た目では、15・6の少女から、20位には成長したかのようだった。
月の光が人の形を取っておりたかの様に白く透き通る肌、夜のナイルの流れを映す長く艶やかな髪。深紅の血で染め上げたように艶やかで、整った唇。そのどれもが、神の技巧を凝らした「美」そのものだった。
先程の可憐さは、微塵もない。悽愴(セイソウ)な表情はむしろ、妖艶な女を思わせた。
「こちらの番だな」
女が静かに呟(ツブヤ)いた。
そして、地を蹴ったとも思えぬ体勢のまま、一気に数メートルも跳躍してのけた。
神父が、女吸血鬼の跳躍に合わせて後ずさる。
女吸血鬼の鋭い爪が、一線を描いた。

赤い筋が、肉の切れる音と共に飛び散る。
「おおおっ!!」
神父の胸から鮮血が飛び散る。
先程、自分の受けた傷と寸分たがわぬ位置を！
「その傷口……ふさげるか？」
「ぬぬぬ………」
胸を押さえて、神父は膝まづいた。
鮮血が、地面に吸い取られていった。
傷口は肺まで届いているかも知れなかった。
「では、死ぬがいい」
女吸血鬼が、死の言葉を投げかけると、爪を神父の心臓に向けた……

一気に振り降ろそうとした手に、突如数本の針が生まれたかのように、女吸血鬼の動きを縫い取った。
「死滅しない死者……か。なる程、呪われた血の系譜という訳か」
「！」
「選手交代だ……二対一ですまないな」
男が立ち上がった。
すたすたと、二人の前まで歩み寄る。
「やな役を押し付けるなよ……恨んでいいか？」
男は神父をかつぎ上げた。
神父は、男の肩に抱かれながら、道のわきに横たえた。
何故か女吸血鬼は、止めを刺すはずの神父を、男が運ぶ様をただ黙って眺めていた。
「相棒が、戦意喪失だ。疲れている所を済まないが、一手、手合わせを願おう」
腕に突き刺さった針を抜き取りながら、女吸血鬼は男に向き直った。
「おれは、ハンターだ。主に銃を使うが、あんたには無駄だろうな」
「………………」
男は懐からカードを取りだした。
見た所、何の変哲もないカードだが、やけに年期の入った物だと言えない事もない。
男は、カードの表面に呪文を唱えると、吸血鬼に向かって放った。
さして力を入れたふうでもないのに、手首のスナップだけでカードは一直線に目標をめがけて飛来した。
「只の紙きれとは、ちょっと違うぞ」
女吸血鬼は、自分に向かって飛来するカードを鋭い爪でなぎはらおうとした。
だが、呪文を刻まれたカードは爪を切り裂き、女吸血鬼の胸に深々と突き刺さる。

女吸血鬼は、悲鳴を上げて、地面にしゃがみ込んだ。
胸を押さえて、息も絶え絶えに喘いでいる。
「先程と同じ場所ですまんな」
今度は十字架と違って、一向に抜ける気配がない。それどころか、徐々にだが更にめり込もうとしている。
「そのカードには、心臓を求めるように呪文を施してある。貫き通すまでカードは止まらんよ」
声を殺して、女吸血鬼が必死にカードを抜き取ろうともがいている。
カードには赤く梵字のような文字が浮きでていた。
徐々にカードは、心臓をえぐり、女吸血鬼は血反吐を吐いた。
男が、女吸血鬼の前に歩み寄る。
女吸血鬼の首に飾られた紋章が、男の目についた。
ドラゴンの紋章であった。
巨大なドラゴンが尾をくわえるように狼の牙を包み込んだもの……
何故か男が一瞬悲しげな目をしたのを女吸血鬼は見逃さなかった。
「真紅の血の香りを漂わせた、闇の中に息づく呪われた永遠の命……貴女たち吸血鬼もまた、生きる為には人の血が必要だったのだろう……」
女吸血鬼は、苦痛と出血に意識が朦朧（モウロウ）とする中、男の声に耳を傾けていた。
呪文のカードは、女吸血鬼の胸に半ば程まで食い込んでいた。
とうに心臓にまで到達している筈だった。
男は、ついに横たえ意識もあるかないかの女吸血鬼に向かって淡々と話し続けた。
「人もまた、生きる為に動植物を殺しては糧とする……人間ばかりが、喰われる側にまわったとて、吸血鬼を責める訳にはいくまい……」
男は吸血鬼の心臓から生えるカードに手を添えると、再び呪文を唱え始めた。
不意にカードの侵攻が止まった。
「！」
よく聞けば、呪文を逆さに唱えたとわかっただろう。
男はカードをつかむと、一気に抜き取った。
鮮血で塗られたカードを懐にしまい込む。
「な、……なぜ？」
「一つの心臓に二つの魂か……死なない死者は、何故さまよう？」
もはや精神力だけで辛うじての意識を保つ女吸血鬼に、男は不思議な問いを投げかけた……

「なんだ、もう終わったか」
神父が二人の側に歩いて来た。

女吸血鬼の出血は既にカードを抜いた時点で止血されている。
傷が傷だけに、再生には時間がかかるだろう。
「美しい女を殺すにはしのびない……そこの神父も同じさ」
「うつく……しい？」
「ふん、わしも今日は調子がでんと思ったら、やはりそれが原因か」
「始めから、彼女を殺す気はあるまい？」
「………………」
神父の胸の傷も、出血は止まっていた。
「お前ならあれぐらいの傷、気力で止血できただろう。わざと負けて、寸での所でおれに責任を押し付ける心づもりとはな」
神父は、いつもなら懐に持った「聖水」を敵に振りかけ、全身を灼くのだが、今日に限ってそれをしなかったのである。
「ふん？……何の事だ？」
男の言うように、先程まで力つきていた神父が別人のようであった。
「最初にお前が彼女を見た目が、魅せられたようだったからな。とても聖職者とも思えん」
「馬鹿を言え。お前こそあやしいものだ。手心など加えおって！これでは完全に再生するぞ」
「お互い、修行が足りんな……」
「まったくだ」
二人は目くばせの後、ニヤッと笑った。
「お嬢さんの名は？」
男が問うた。
「ヒルデ……ガード」
「ヒルデガードか……いい名だ。一つ言っておこう……女は男に守られるべきさ」
ヒルデガードは黙って男の言葉に聞き入っていた。
「わしも一つ有り難い言葉を教えてやろう」
ヒルデガードは神父に向き直った。
「わしは、無敵だ！」
神父も負けてはいなかった。
「相変わらず、有り難いよ。お前の言葉は」
大きな声で笑う二人をヒルデガードはじっと見つめていた。
彼女は、二人がこの地を去ってからも、この時、男に感じた甘い想いを、ついぞや、理解は出来なかった……

でんでん ちゃっちゃ
さあみなさんご一緒に!
ほのぼの 2ペェヂまんが
ブランカさん
でんでん ちゃっちゃ
おサカナ くわえた
おー…っ!
ぽっ
しゅ
ドラ猫〜
こっちよ♡
こっ……
ぶわぁっ
コオのクソ猫ぉ!
追ーおっかけーて♫
変身している。
待ちゃーがれこのヤローっ
本気で駆けてく〜♫
返せーあたしの昼メシーっ
ずだだだだだ
にゃ!?
びっくぅ!
妖気〜なブランカさん♪
だだだだだだだ

ドガッシャーーーんっ
ブワーッ
みんなは恐れてる―♪
ガラガラパリーン
何だ何だよ
キャーッ店がっ店があっ
←ペレッタ
ひょえええ
落ちつけっ落ちつけブランカぁ
神父は笑ってる―♪
うわぁっはっはっはっはっはっはっは
こりゃゆかい
ルールルルルッルー♪
ふまれた
あっあいつは鬼だ
そっか吸血鬼だったっけ
ドドドドドド…
今日ーもいい天気ー♪
まてーっ
ぎゃー
なんじゃこりゃ

《バーディーソフト・ファンクラブ結成のお知らせ》

この度、たくさんのご要望により、ファンクラブを結成する事になりました。以下の説明をよく読んで、別紙の「バーディーソフト・ファンクラブ申し込み用紙」に必要事項をもれなく記入して申し込んで下さい。

「入会特典」

新規入会者全員プレゼント　　『JOKER 2』か『BEAST 2』その他のオリジナルポスターのどれか1つを、入会者全員にプレゼントします。詳しくは「申し込み用紙」をご覧下さい。

会員証の発行　　貴方だけの会員ナンバーが登録された、バーディーソフト会員証を発行します。

会報の発行　　バーディーソフトの会報を発行いたします。新作情報や普段は誰も知る事のできない製作秘話、会員からのお手紙の紹介、マンガ、などなど、楽しい情報が満載です。

入会費	５００円
年会費	１０００円
合　計	１５００円

「申し込み用紙」の裏面が白紙になっていますので、ゲームソフトの感想や、イラストなど、ご自由にお書き下さい。イラストは、今後の会報などで掲載させていただく場合もあります。

「送り先」

事務処理上、おつりを返却できない場合がありますので、おつりのないように合計金額をしっかり確認して別紙の「ファンクラブ申し込み書」と「現金書留か郵便為替」を添えて下記の住所に送って下さい。

〒124 東京都葛飾区堀切3－12－8
バーディーソフト・ファンクラブ係
『バーディーソフトファンクラブお問い合わせ先』
TEL. 03－3695－7370

尚、こちらから送る郵便物の包装紙は（Ｈ！）ではありませんのでご安心下さい。また、入会の際に年齢、性別などは一切問いません。たくさんのご応募お待ちしています。

《終わりに》

最後に、『JOKER 2』制作にご協力下さいました方々、流通の皆様、雑誌社の皆様、『JOKER 2』を買って下さったユーザー様、その他関係者の方々に、この場をお借りしてお礼致します。

尚、ユーザー登録葉書はなるべく送付して下さい。葉書の感想を毎日楽しく読ませて貰っています。今まで通り、葉書でのキャラクターへのファンレターも受け付けています。

いつまでも待っています……

『ユーザーサポート』

製品には万全を期しておりますが、万一プログラムが作動しない場合は、まず次の事をお確かめ下さい。

・パソコン本体とディスプレイ等が正しく接続されていますか？
・ディップスイッチや設定が間違っていませんか？
・ディスクは正しくセットされていますか？
・一度電源を切って、パソコンの状態を安定させてからたち上げましたか？

それでも作動しなかったら……
同じ機種の別のパソコンで作動しましたら、ご使用の機械の故障が考えられます。

前記のいずれの場合にも作動しない時は、ゲームディスクの不良が考えられます。お手数ですが、氏名、住所、電話番号、使用機種名（ボード類や増設ドライブなども出来るだけ詳しく）、ゲームが正常動作しない時の詳しい症状をお書きの上、「全てのディスク」をお送り下さい。至急調査の上、交換品をお送り致します。

尚、お客様の不注意によるディスクの破損は、1500円の修理費がかかりますので、1500円分の郵便為替を同封して下さい。

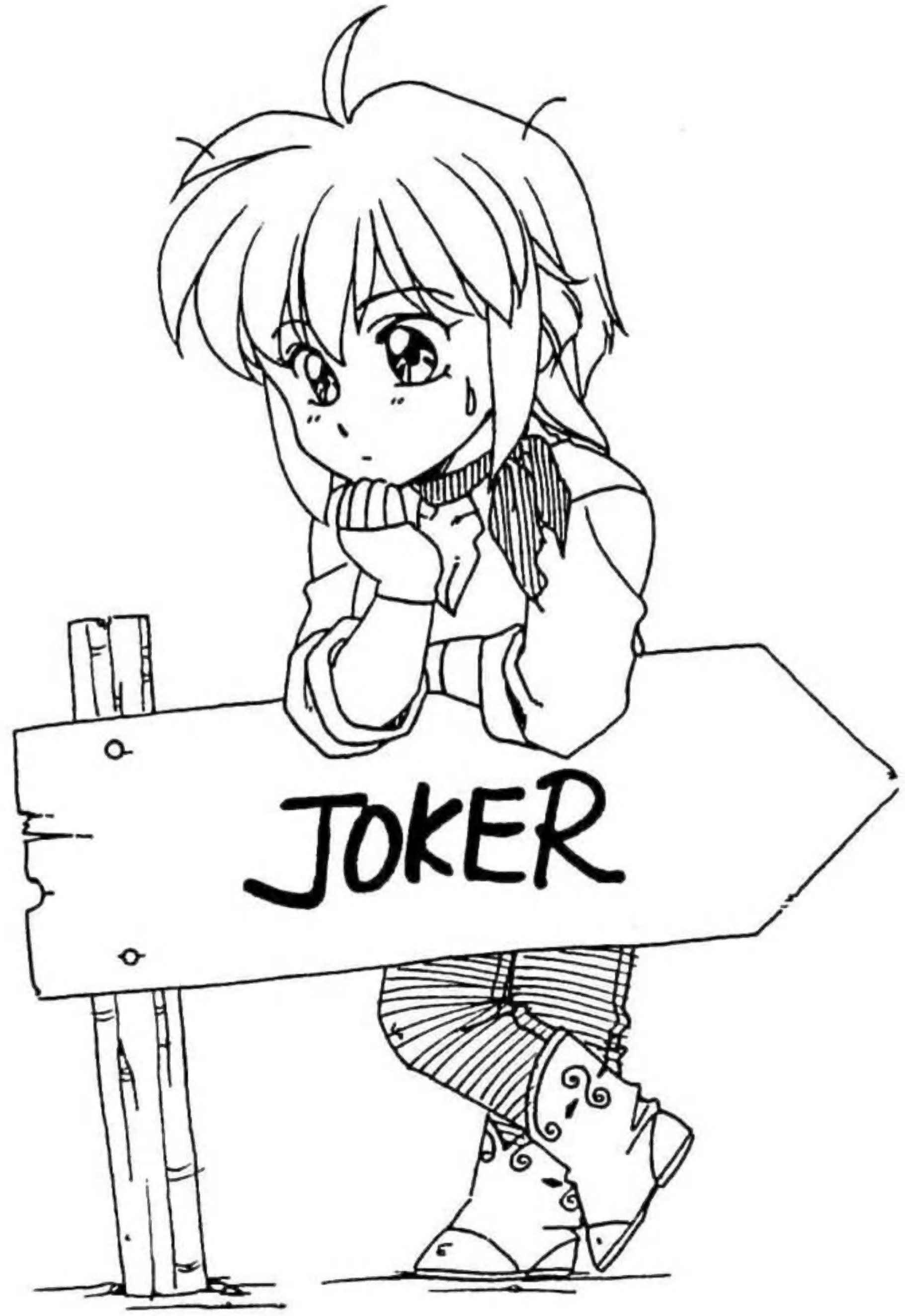
『ご注意』

『JOKER 2』のプログラム及び、パッケージ、マニュアルは、バーディーソフトの著作物です。無断で複写、複製する事を禁じます。

『ユーザーサポートお問い合わせ先』
TEL. 03－3695－7370

〒124 東京都葛飾区堀切３－12－８
バーディーソフト開発部２課

バーディーソフトから、お知らせ!!
今、バーディーソフト作品、
〝バーディーワールド〟を、通販でお買い求め下さる
お客様に限り、もれなくCAL特製テレホンカードプレゼント!!



開発部二課

CREW

〈企画・原案〉
林家ぱー
あき　まさき

〈キャラクターデザイン・原画・マニュアルイラスト〉
林家ぱー

〈彩色師〉
林家ぱー
美龍

〈シナリオ〉
あき　まさき

〈プログラマー〉
HIDE
KENJI
K'ris

〈音楽〉
ストロベリー

〈制作〉
バーディーソフト

BIRDY SOFT